

紀要

■設立50周年記念号Ⅱ

円筒上層式土器における土偶意匠の展開と実態

—認識の更新と深化に向けた素描— 瀬口 眞司 (1)

滋賀県における縄文時代早期後葉～前期前葉遺跡の集成

..... 小島 孝修 (20)

はじまりのモニュメント

—縄文晩期における墓配置の一事例— 松室 孝樹 (28)

上砥山遺跡出土木製品の年輪年代測定からみた出土遺構の数値年代

..... 前田 仁暉・星野 安治・内田 保之 (35)

大津市神領所在瀬田廃寺造営過程の検討

..... 小松 葉子 (42)

八幡山城跡出土軒平瓦についての一試論

—主に製作技法・製作痕跡から— 山口 誠司 (54)

滋賀県内出土の江戸時代の化粧道具

..... 田中 咲子 (63)

長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編1＞

..... 古山明日香・福井 知樹 (68)

茶の利用についての研究ノート(1)

..... 小竹 志織 (85)

文化財の保存と活用のこれまでとこれから

—調査法人滋賀県文化財保護協会の取り組みから— 堀 真人 (91)

35

はじまりのモニュメント

—縄文晩期における墓配置の一事例—

松 室 孝 樹

目次

1. はじめに
2. 相谷熊原遺跡の縄文時代晩期墓地について
3. 配石の持つ意味—石棒・石皿を用いた祭儀—
4. 規則性をもった配列
5. はじまりのモニュメント

— 論 文 要 旨 —

本稿では、東近江市相谷熊原遺跡で検出された縄文時代晩期中葉の土坑墓・土器棺墓について、墓地内での配置のあり方について再考した。発掘調査報告書では、土坑墓の造墓が先行し、基本的には土坑墓から土器棺墓へと埋葬方法が変換していくものとして捉えたが、再検討の結果、土坑墓から造墓活動が開始されているが、必ずしも土坑墓から土器棺墓へと一律に墓制が変換したわけではなく、両者が混在しながら造墓されていた可能性もあることが配列関係から窺われることを指摘した。

土坑墓・土器棺墓の造墓にあたっては、線状・環状の配列構造という規範が存在しており、これに基づきながら造墓していくと同時に、一部では両者がお互いを干渉することなく配置されている状況も確認できた。これらの基準となったのは、造墓の最初期段階に造られた配石墓であり、その上部の配石（石列）が墓地のモニュメントとしての役割を果たし、全体の配置構造を規制していた可能性を指摘した。

——— キーワード

相谷熊原遺跡 縄文時代晩期 土坑墓 土器棺墓 配石 石棒 石皿 線状配列 環状配列

1. はじめに

本稿は、東近江市相谷熊原遺跡で発見された縄文時代晩期中葉の土坑墓・土器棺墓を題材として、滋賀県における縄文晩期墓制の側面について考えるものである。調査はすでに10年以上前に実施し、発掘調査報告書（以下、「報告書」と略す）も刊行されているが（松室・重田 2015）、今回は報告書刊行以降、改めて検討を加えた点について再考する。

調査当時は発生期土偶を含む縄文時代草創期の遺物・遺構に注目が集まり、縄文晩期の墓地についてはさほど注目されなかったが、調査では凸帯文土器出現直前（篠原式）に限定される土器棺墓が調査区内から30基、それら土器棺墓に先行する土坑墓が少なくとも40基検出された。滋賀県内においてはそれまでに滋賀里遺跡や北仰西海道遺跡など、著名な縄文晩期の集団墓が知られているが、相谷熊原遺跡の調査によって、それまで不明瞭だった鈴鹿山脈山麓部における縄文晩期墓制の一事例が明らかとなった。

報告書では、土坑墓から土器棺墓へという漸移的な移行を想定し、分布状況から直線状・環状というルールに則り造墓活動を行っている可能性等を提示した。また、出土遺物の中には蛇紋岩製の磨製石斧・黒雲母流紋岩質溶結凝灰岩（塩屋石）を用いた石冠など、北陸地方・飛騨地方から直接もたらされた遺物も一定量含まれていることも判明した。特に北陸地方からの搬入品と考えられる遺物が墓地内から出土していることは、縄文晩期土器棺墓という墓制のルーツを探るうえでも非常に示唆的でもある（中村 1993）。

土器棺墓については資料数も多いことから、今後も県下の縄文晩期墓制を検討するなかで重要な位置を占めることは間違いないだろうが、土坑墓（石組墓・配石墓）については、報告書でも十分検討できなかった。今回は、土坑墓を中心に改めて整理することに主眼を置き、この遺構の持つ意味について考えてみたい。併せて、報告書でも触れた配列についても再度検討を加えてみたいと思う。

2. 相谷熊原遺跡の縄文晩期墓地について

(1) 墓地の概要

最初に、相谷熊原遺跡における縄文晩期の墓地について概観しておきたい。

相谷熊原遺跡は、縄文時代草創期から晩期まで断続的に続く、縄文時代の集落遺跡である。このうち、縄文晩期中葉に形成された墓地は、遺跡南西端の愛知川とその支流の渋川が合流する付近の段丘崖に近接した緩斜面上に営まれている。上層は土器棺墓、下層は土坑墓からなり、その他には、建物等を構成したと考えられる小穴が2,300基以上検出された（松室・重田 2015）。土器棺墓を構成する深鉢等の出土遺物については、縄文晩期中葉の篠原式段階のもので占められることから、限られた時間内に造墓活動が行われたことが窺われる(1)。

土坑墓と土器棺墓の前後関係については、報告書では大枠の理解として土坑墓が土器棺墓に先行する可能性がきわめて高いとしたが、これは土坑によって破壊された土器棺墓がほぼ存在していなかった状況を鑑みれば、土坑墓の造作活動を収束させたのち、土器棺墓へとその造作主体の大勢を移行させたと考えたのは妥当とする解釈である。なお、土坑墓とはしているものの、必ずしも人骨・副葬品の出土が認められたわけではなく、これらの認定については次節で述べるように、分布状況から方形（長方形・正方形）を主体とし、人体が収納可能な法量であること、主軸方位を一定程度揃えているもの等を選択基準として抽出している。

(2) 土坑墓の抽出

調査では、明確に土坑「墓」と断言できる遺構を抽出し得なかったが(2)、法量から墓の可能性が考慮できるとして、報告書では下記の方法で「墓」の認定作業を行っている。認定作業にあたっては、

- (a) 人体埋納可能な規模の土坑であること
- (b) 一定程度の間隔で配置されていること
- (c) a・bの条件に合致する土坑、並びにそれらと同規模の土坑であること

等の条件を課し、その結果、長軸0.6m～1.6mを測るものを土坑墓として抽出した(3)。

また、検出時の残存遺構深度については、おおむね検出高0.35m～0.50mに集中する傾向にあった。埋土の堆積状況には2パターンあり、ほぼ単層で構成されるもの、埋土に掘り返しの痕跡が認められるものに大別できた。

(3) ふたつの土坑墓

ここでは、本稿の主題となるふたつの土坑墓（石組墓・配石墓）の検出状況等について再確認しておきたい。

石組墓である土坑B756は、長軸1.36m・短軸0.48m・深度0.47m、主軸方位はN-54°-Wを測る。堀方周囲に石組みが巡らされており、これは2段になった堀方の拡張された上段のものに対応することから、掘り返しに伴うものと考えられる。

土坑B756と切り合い関係にある土坑B978は、長軸1.50m・短軸0.53m・深度0.32m、主軸方位はN-88°-Eでほぼ東西方向を測る。この土坑についても、堀方が2段になっていることや埋土の堆積状況から、墓坑の拡張を含む掘り返しが行われたことを想定している。また、この段階に石棒・石皿を含む配石が設置されている（報告書では「石列B978s」として報告）。

両土坑の切り合い関係について報告書では、土坑B756の石組みの一部を破壊して、土坑B978が構築されたものとした。しかし、再検討の結果、B756底面はB978を切っている可能性が高いこと、B978底面形状についてはその影響を受けていることが窺われ、土坑B978が土坑B756よりも

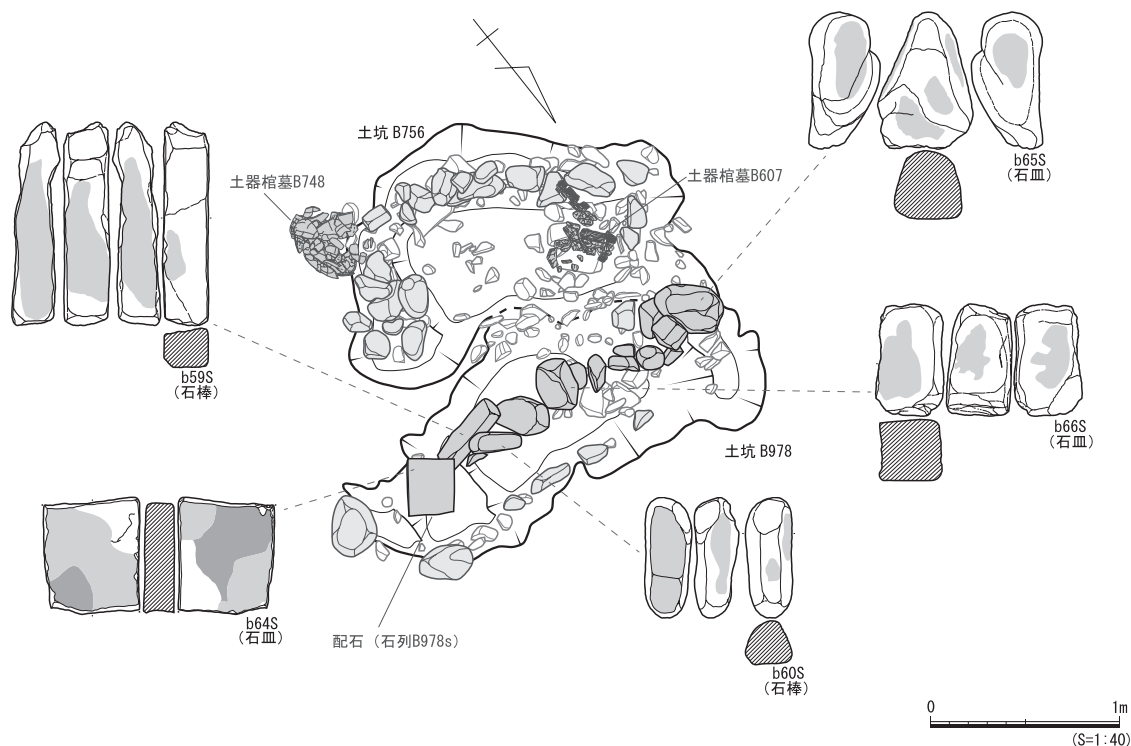


図1 土坑B756・B978検出状況図

相対的に古くなると考えるのが適当だと、現在では考えている。

以上のことから、両者の造墓順序については下記のとおり修正したい。

- ①土坑 B978 の掘り込み
- ②土坑 B756 の掘り込み
- ③土坑 B756 の掘り返し、石組みの構築(掘方の一部拡張)
- ④土坑 B978 の掘り返し(拡張)・石列 B978s の構築

なお、それぞれの埋土中から土器の出土は認められていないが、土坑 B978 からは石鏃 1 点・剥片 14 点(サヌカイト)が出土している。石列 B978s 構成石材のなかには、石棒・石皿も含まれていた(図1)。

3. 配石の持つ意味—石棒・石皿を用いた祭儀—

土坑 B978 では、墓坑上面に石棒・石皿等からなる配石(石列 B978s)が設けられていた。この配石については掘り返し時に構築されたものと考えているが、ここでは構成石材に石棒・石皿が含まれていた理由について考えてみたい。

石棒・石皿の象徴的意味について谷口康浩は、石棒を男性、石皿を女性と性象徴として対に用い、生殖行為を隠喩表現する儀礼行為が、縄文中期から晩期にかけて広汎に行われたことを多くの事例から検証した。そして、このような儀礼行為が、再葬を含む葬送儀礼の過程で特徴的に行われていた点に注目し、葬制の中で象徴的な(石棒と石皿を用いた擬似的な)生殖行為が演じられることの意味について、死者を他界へと通過させ祖先として再生させるための

通過儀礼だと解釈した(谷口 2006)。石棒の造形に象徴されたものとして、神霊が持つ聖的な生殖力や、そうした力への信仰が根底にあった可能性を谷口は想定している。

いっぽう、石皿については、鈴木保彦が配石遺構や配石墓から石皿が出土することが少なくないことを示し、第二の道具としての性格が窺われることから、このような石棒との組み合わせ例からみて、女性生殖器の象徴物としての性格を有していたと推測した(鈴木 1989)。

以上の解釈に従い、埋葬儀礼を、生の世界から離れた死者を然るべき位置へと安置し、祖先を頂点とする社会秩序の中に再統合するための通過儀礼として捉え直した場合、死者に生命力を付与するという不可思議な行為は、極めて単純かつ自然な思想として理解できるようになる。すなわち集団墓を造営する手段は、埋葬はたんなる死体の埋葬処理などではありえず、きわめて神聖な宗教的祭儀だったと考えられる。そして、石棒・石皿が墓地の祭儀のなかで用いられたのは、子供を作る力と同じく、死者を死後の世界に再生させることのできる力として信じられていたからだと思定できる(谷口 2005)。

4. 規則性をもった配列

(1) 土坑墓の配列状況

次に、検出された土坑墓がどのような配列状況だったか、改めて確認しておこう(4)。

報告書では、大別して3方向に配列されていたと推測した(図2)。これらの時間的前後関係については前述の修

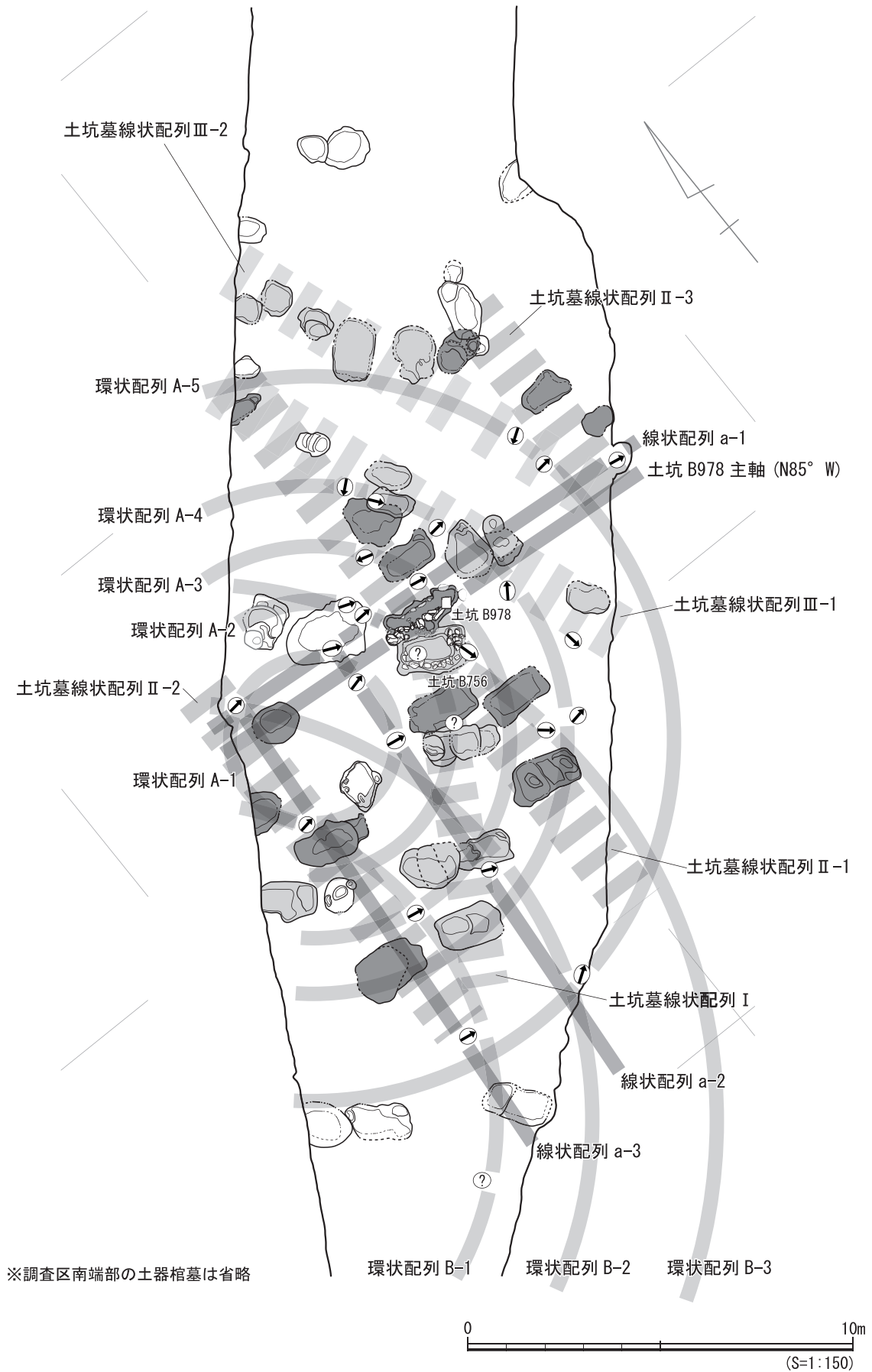


図2 相谷熊原遺跡晩期墓地 土坑墓・土器棺墓配列想定図

正にしたがい、土坑 B978 を含む土坑墓線状配列Ⅱ（以下「土坑墓」を略す）が最も古く、次いで土坑 B756 を含む線状配列Ⅰ、そして線状配列Ⅲの順に新しく造墓されていったと考える。

最初に、土坑 B978 とそれに関連する土坑墓群について確認する。土坑 B978 は土坑 B756 に一隅を切られており、また、掘り返し時に石列 B978s をほぼ同一方位に構築している。この石列によって土坑の主軸方位を可視化させたともいえ、同一方位土坑の多さは、石列の存在に起因すると考えている。

土坑 B978 は、これが中心となるような位置取りで両側（南北方向）に土坑墓が展開していく（線状配列Ⅱ-1）。これと同様の直線状の配列はⅡ-1 と並行してさらに 2 条見出すことができ、線状配列Ⅱ-1 の東西それぞれ約 6 m の距離で同じような線状配列を想定した（線状配列Ⅱ-2・Ⅱ-3）。これら線状配列の特徴として、①南北方向、②等間隔、③並行であることが挙げられる。個々の土坑墓がどのように可視化されていたか復元のしようはないが、これら土坑墓の造営に当たって一定のルールが存在したことは間違いないだろう。配列Ⅱの主軸方位は N-5° -E を測る。

次に土坑 B756 とそれに関連する一群について確認する。

土坑 B756 と主軸方位をほぼ同一とする一群は 5 基で構成され、それぞれの間隔も不均衡だが、これをひとつの配列として捉えた（線状配列Ⅰ）。配列の主軸方位は N-36° -E を測る。

この B756 を起点とする線状配列Ⅰについては、線状配列Ⅱよりも構成する土坑墓の数が少ないこと、同一主軸を指向する土器棺墓が存在しないことなどから、線状配列Ⅱを構成していたグループと異なる集団が造墓に加わった可能性が考えられる。線状配列Ⅱから置き換わったか否かは不明だが、線状配列 a-2 を構成する土器棺墓に切られているものもある状況を鑑みると、一定時期は併存していた可能性も考慮する必要がある。

最後に線状配列Ⅲは、南北方向に主軸方位をとる（N-19° -W）、2 列の土坑墓群列である。配列間の距離は約 3 m を測る。一見、各列を構成する土坑墓に主軸方位の共通性は認められないが、主軸方位が大局的には似通うこと等から、線状配列Ⅲは線状配列Ⅰ・Ⅱほどの厳密さはないが、やはり一定の主軸方位の規則性を内包しつつ群構成をとるように考えられる。

さて、土坑 B756・B978 は、調査区内の土坑墓のなかで唯一、石組みあるいは配石（石列）を有したものであることから、これら土坑墓の造墓における最初期のもの、もしくは基点となった可能性を考えている。結果的には直線的に配列された墓跡が抽出できたわけだが、そもそもこれらを造っていくにあたり主軸方位を揃えたり配列を整えたりするのに、可視化できる基点がどこか必要であることを考えれば、土坑墓個々の前後関係は明確にし難いものの、この

ような可視化しやすい遺構が最初期につくられた蓋然性は高いのかもしれない。

(2) 土器棺墓の配列状況

つぎに、土坑墓の上層で検出された土器棺墓の分布・配列状況についても概観しておく。相谷熊原遺跡で検出された土器棺墓は、ほぼすべての土器棺墓が深鉢を棺身としていた(5)。

そして、土器棺墓に使用された構成土器の使用時間幅については、土器棺墓には縄文晩期後葉の凸帯文土器は使用されておらず、また滋賀里Ⅲ a 式も認められていない。すなわち、土器棺墓に使用された土器は、すべて篠原式併行のもので占められていた。

土器棺墓の配列について報告書では、線状配列 3 条・環状配列 8 条を抽出した。

最初に線状配列からみると、土坑 B978 の北側で同じ主軸方向をとり、かつ開口方向も揃う土器棺墓群の配列（土器棺墓線状配列 a-1、以下「土器棺墓」を略す）、これに直交する配列 2 条を抽出した（線状配列 a-2・a-3）。これらはいずれも開口方向が東側に揃う。

このように、土器棺墓の線状配列については、土坑墓造営の際に行われていた線状配列の規範、すなわち土坑 B978 の主軸方位を利用した造墓活動の規範を、土器棺墓においても援用していた可能性が考えられる。特に、土坑墓で抽出した線状配列Ⅱ-2 と土器棺墓の線状配列 a-3 はほぼ重複しており、且つ切り合い関係も認められない。

環状配列については、線状配列 a-1・a-2・a-3 上に位置する土器棺墓を結ぶ環が抽出できたことから（環状配列 A-1、半径 2.2m）、同心円状に抽出を試みた結果、環 A の配列は A-5（半径 9.2m）まで拡大した。環状配列については、線状配列とは異なり、土器棺墓の開口方向に規則性等を見出すことはできない。

おなじように調査区の南西側でも、土器棺墓 5 基からなる環状配列が確認できた（環状配列 B-1、半径 8.2m）。土器棺墓は 3.5m～4.5m の間隔で規則的に並んでおり、開口方向も揃うなど特徴的な様子を示していた。環 B の配列は B-3（半径 13.8m）まで確認できる。なお、環 B-3 よりも大きい環になると、環は崖下になってしまい存在し得ない。実際の立地上では図 2 で示した環 B-3 が限界となる。

これらの土器棺墓のうち、最も古く造墓されたものについては、線状配列 a-1 を構成する一群がそれに該当するものだろうと想定している。それらが、土坑墓に続き土器棺墓の配列の基準を作っていた可能性は極めて高いと考えている。

5. はじまりのモニュメント

(1) 土坑墓・土器棺墓の配列・造墓順序

土坑墓・土器棺墓の配列の順序については、基本的には土坑墓が先行することは明かで、その土坑墓の配列が3系統化できることも既に述べた。そのうち2系統の配列（線状配列Ⅰ・Ⅱ）については、土坑 B756・B978 の切り合い関係によって、土坑 B978 を中心として展開する線状配列Ⅱが先行するものとする。これについては数量的にも多く、土坑の大半が相当する。線状配列も土坑 B978 上を通る列（Ⅱ-1）のほかに、もう2列抽出することができる（Ⅱ-2・3）。

これら線状配列Ⅰ・Ⅱの興味深い点として、文字どおり中心に位置する土坑 B756・B978 の存在が挙げられる。特に土坑 B978 に着目すると、これは同一主軸方位を指向する土坑が分布する範囲の、ほぼ中心に位置している。配石（石列 B978s）はおそらく可視化できる状態だったと考えられることから、まさに同一グループの中心に位置するモニュメントとして位置していた可能性が指摘できる。

ついで土器棺墓の造営であるが、配列という観点から考えるならば、土坑墓群の配列を引き継ぐ、線状配列を構成する土器棺墓群が古相を示すものとして捉えられる。これらは当初、東方向への開口（主軸の東西指向）・線状配列といった、土坑墓の時と同じ習慣を行うが、ほどなく新たな原理を採用する。それが環状配列であり、順次転換させていったものと考えられる。

土坑墓と土器棺墓の時間的前後関係については、両者に明確な切り合い関係が認められる箇所が複数存在したことから、土坑墓が土器棺墓に先行する可能性がきわめて高いと考えていた。これは調査時においても、明らかに土坑墓を切って土器棺墓が形成されている事例は複数例確認できたものの、逆に土器棺墓を破壊して土坑墓を形成している事例は確認できなかったことから首肯できるものと考えていた。しかし、土坑墓と土器棺墓が同時併存していて、両者が互いを干渉しないように造墓していた可能性も考慮しなければならない。再度その視点で確認したところ、前述の土坑墓線状配列Ⅱ-2と土器棺墓線状配列 a-3 がほぼ同一ライン上に位置しており、その配置状況を確認したところ、それぞれの配列を構成する土坑墓・土器棺墓は互いを干渉することなく造墓されていることをあらためて確認した。特に土器棺墓線状配列 a-3 は、土坑 B978 の主軸に直交する配列であり、土坑墓線状配列Ⅱとの強い関連性が窺われる配列である。すなわち土坑墓・土器棺墓ふたつの配列は同時併存していた可能性が考えられ、これらの配列を構成する土坑墓・土器棺墓については、両者を干渉することなく造墓されていた可能性が考えられるのである。

(2) 造墓基準としての配石墓

次に、線状配列Ⅰ・Ⅱの空間的な広がりについても確認しておきたい。両者とも、東西方向については調査範囲の制限もあり不明な点が多いが、南北方向については、おそらく現時点で検出しているものではほぼすべてである可能性が高い。そのような場合、配石（石列）・石組を有する B978・B756 は、土坑墓群の中心に位置しており、両者を中心に同一主軸方位の土坑墓群が展開していく様子が観取できる。特に土坑 B978 と同一主軸方位をとる土坑墓群にとって配石（石列 B978s）の存在は、主軸方位・配列の基軸となるものだった可能性が高い。すなわち、配石は、造墓時の目印であったと同時に、石棒・石皿を用いて構築されていることから、墓地内における祭儀の中心地、死者を他界へと通過させ祖先として再生させるための象徴的な場所として位置付けられていた可能性が考えられる。

土坑墓と土器棺墓の造墓順序については、大勢において土坑墓が先行することに相違ないが、あらためて詳細を検討すると、造墓の初期段階で両者の重複した状況も想定できることがわかった。

(3) 小結

相谷熊原遺跡の縄文晩期墓地における土坑墓と土器棺墓の関係について、調査から10年を契機に再検討を試みた。結果については、すでに記述のとおりであるが、最後に付記しておくならば、500 m²ほどの調査区内に無数といっても過言でない遺構が現れ、調査も錯綜を極め、また、その成果をまとめる段になれば、一見、無秩序にも見える遺構群からどのように情報を引き出せば良いかと悩み…そのような状況下で辿り着いたのが、配列という発想だった。調査所見も考慮したうえで線から環への配列の変化という整理を試みたが、これが最適解なのか未だ自信はない。ただし、土坑墓上の配石には当然なんらかの意味はあっただろうし、それぞれの墓が示す向きにもなんらかの意味があったはずである。これまでの考察でどこまで縄文人の死生観に近づけたかわからないが、今後も考察を進めていきたい。

註

- (1) 凸帯文土器も出土しているが、極めて客体的な出土に留まる。
- (2) いくつかの土坑墓からは、剥片石器（石鏃・石核・楔形石器等）、礫石器（石皿・磨石等）が出土している。
- (3) 抽出作業は、山田康弘の残存人骨からの土坑の規模区分（山田 1999・2001）、あるいは岡田憲一による大阪府向出遺跡出土坑の分析をとおして提案された、土坑の規模区分（岡田 2000）等を参考としながら行った。
- (4) 一般的に土坑墓の列状配置（本稿でいう「線状配列」）は、墓の長軸方向が一定の方向に集中していることを指している。本稿で述べる線状配列とは、「主軸方位・形状・規模に類似性を持つ遺構が、群として直線的かつ規則的に並んでいるも

の」を指しており、特に今回の事例は、遺構の長軸方向に沿った並びではない。

- (5) 土器棺墓 B607 の 1 基のみ残存状況が不明だった。ただし、これについても深鉢口縁部が残存していたことから深鉢を棺身としていた可能性は高い。

文献一覧

- 岡田憲一(2000)「土坑「墓」認定の手続き－大阪府向出遺跡の分析・基礎編－」『関西の縄文墓地－葬り葬られた関西縄文人－』
関西縄文文化研究会
- 松室孝樹・重田 勉 (2015)『相谷熊原遺跡Ⅱ 相谷寺前遺跡 相谷下村遺跡』（農地環境整備事業関係遺跡発掘調査報告書 2）
滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 鈴木保彦(1989)「第二の道具としての石皿」『縄文時代』2 縄文時代文化研究会
- 谷口康浩(2005)「石棒の象徴的意味」『國學院大學考古学資料館 紀要』第 21 輯 國學院大學考古学資料館
- 谷口康浩 (2006) 「石棒と石皿－象徴的生殖行為のコンテクスト－」『考古学』IV
- 中村健二(1993)「県境の遺跡」『滋賀文化財だより』No.184 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 山田康弘(1999)「縄文人骨の埋葬属性と土壌長」『筑波大学先史学・考古学研究』第 10 号 筑波大学歴史・人類学系
- 山田康弘(2001)「縄文人の埋葬姿勢」(上)・(下)『古代文化』第 53 巻第 11 号・第 12 号 財団法人古代学協会

挿図典拠

図 1・2 松室・重田 2015 を一部改変

（まつむろ たかき：調査課 課長）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.35 2022.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages